

サービスラーニング受講生の学習成果を向上させる受講生支援

中 里 陽 子（鹿児島大学）

津 曲 隆（熊本県立大学）

問 題

本研究は、サービスラーニングプログラム受講生の学習成果（汎用的能力の定着度）とプログラム関係者による受講生支援との関係性を検討することにより、サービスラーニング受講生の学習成果の向上に関わる理論的示唆を得ることを目的とする。

1. サービスラーニングとは

サービスラーニングとは、学生（受講生）が異なる文化を持つ地域社会と協働しながら、地域社会を発展させることを狙いとした地域密着型経験学習プログラムである（中里・吉村・津曲、2015）。学生が地域に一方的に奉仕するボランティア活動等とは異なり、学生と地域社会が対等な関係を維持しながら、互いの知識を持ち寄り、創発的な地域課題解決に従事させることで、学生の能力を開発する狙いも合わせ持つ取組みである（Jacoby, 1996; Furco, 1996; Howard, 1998）。

サービスラーニングは米国で発祥し広く活用されてきた教育手法の一つであるが（e.g., 唐木、2010）、2000年代以降、我が国の高等教育機関でも積極的に導入されるようになった（e.g., 木村・河井、2012; 木村・中原、2012; 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター、2010）。その背景には、中央教育審議会（2005）の「我が国の高等教育の将来像（答申）」において学生の社会的自立を目指す教育手法の導入が提案されたことをうけ、文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」や「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）」等の補助事業が開始されたことが本格的な実践導入の契機となったと考えられている。また、2013年度より開始された文部科学省「地（知）の拠点整備事業（COC）」（文部科学省、2013）による採択大学が、地域に貢献できる人材育成のための教育手法としてサービスラーニングに着目したことも、我が国の大学教育における展開に拍車をかけたと考えられる。

こうして国内外で広く実践されているサービスラーニングは、その教育効果も実証的に確認されている。たとえば、サービスラーニングは受講生の自己効力感や（馬場・島・大宅、2006; Cram, S. B. 1998; Galindo-Kuhn & Guzey 2001; Omoto, Synder & Martino, 2000; Reeb, Katsuyama, Sammon & Yoder, 1998）、汎用的能力を向上させる効果を持ち、具体的には、自立性をはじめとする「自己制御能力」、他者への共感的態度やリーダーシッ

プ等の「他者との関係構築能力」、論理的思考力や批判的思考力等の「課題解決能力」を定着させることが示されている (Jameson, Clayton & Ash, 2013; Brandenberger, 2013)。また、62 のサービスラーニング研究事例を対象としたメタ分析を行った Celio, Durlak, & Dymnicki(2011)は、サービスラーニング受講を通して学外で学びを経験した受講生が、その後の学内の学業成績を向上させていることを報告している。さらに、サービスラーニングの受講経験を持つ者は、受講を通して市民性を獲得し、受講後も一市民として地域社会活動への関与を継続させる傾向があることも指摘されている (Astin, et al., 2006)。

これらの調査結果によって、現代の大学教育におけるサービスラーニングは、受講生の多様な学習成果をもたらす効果的な教育実践の一つであると捉えられており、大きな期待が寄せられている。

2. サービスラーニング受講生の学習成果を規定する要因

サービスラーニング受講生の学習成果は、受講生自身の経験学習 (e.g., Kolb, 1984) を通して向上することが想定されている。具体的には、受講生が、地域課題の解決を学びの場としながら、学習目標を設定し、活動過程と結果両方の良否に基づいた省察を行い、教訓を獲得し、次の取組みの方向性や目標達成に向けた戦略を再検討する自律的な意識化習慣を定着させることが、学習成果の向上につながると考えられてきた (e.g., Ash & Clayton, 2009; 和栗, 2015; 河井, 2012)。

しかしながら、学外を学びのフィールドとするサービスラーニングは、学習環境としての統制が難しく、想定外の事態が起こりやすい。高校時代まで教員主導の授業を受身的に受講してきた現代の学生らにとって、想定外の事態に対処しながら、自発的に経験学習を遂行することは容易ではないと想定される。こうした状況のもとで、学習成果を向上させるためには、受講生を取り巻く関係者による的確な支援が不可欠であろう。

以上の背景をもとに、本研究では、従来重視されてきた受講生による自律的な経験学習について、それを促進すると想定される関係者による受講生支援に着目し、サービスラーニング受講生の学習成果に与える影響を検討する。サービスラーニング受講生の学習成果の向上に影響を与える関係者として、本研究では次の4者に着目する。

第1は、教員である。教員は授業において、学術的知識の提供者としての役割を持つ。このことから、教員による支援は、サービスラーニングにおいても、受講生の知識定着を促進し、課題解決に関わる能力の定着に効果をもたらすと考えられる。

第2は、地域住民である。地域住民は、サービスラーニングの活動を通して、地域住民の一員としての振る舞い方を学生に提示する役割を持つ (桜井・津止, 2009)。こうした地域住民による働きかけが、受講生の自己制御能力の向上を促進すると考えられる。

第3は、サービスラーニングで活動を共にする他受講生 (グループメンバー) である。従来の研究では、受講生間の相互作用が受講生の学習を促進する働きを持つことが示されている (木村・河井, 2015)。この背景には、受講生が他受講生と関わりながら、他者との関係構築能力を獲得することで、円滑な協働活動を促し、安定した経験学習活動へつなげ

ている可能性があるとして予想される。

そして第4の関係者として、本研究では、近年の大学教育において活用例が増えてきている「学生アシスタント」に着目する。

学生アシスタントによる受講生支援は、「支援を受ける学生（受講生）」と「与える学生（学生アシスタント）」の相互作用を通して、両者の能力や学習意欲を高め合う効果的な取り組みである。従来の学生アシスタントによる受講生支援は、授業時間外の活動が多く、履修相談や生活相談等が主な業務とされていた（大石・木戸・林・稲永、2007）。近年では、大学がサービスラーニングを含む経験学習型教育（アクティブラーニング型授業）を積極的に導入するようになったことを受け、授業時間内の学習支援を目的とした教育補助者としての学生アシスタント活用例も増えてきている（e.g., 岩崎、2014; 岩崎・田中・竹中・川瀬、2012）。授業時間内の学生アシスタントは、アクティブラーニング型授業における学習方法の習得や学習意欲の向上のための支援に関与している可能性があり、特に受講生の知識定着や課題解決能力の向上に影響を与えていると予想される。

以上の仮説をふまえながら、本研究では、サービスラーニング受講生に関わる教員、地域住民、他受講生（グループメンバー）、学生アシスタントが受講生自身にどのような支援を与え、それらが受講生の学習成果としての汎用的能力の定着にどのように関わっているかを検討する。

方 法

1. 調査対象者

本研究では、熊本県立大学の平成26年度集中講義「新熊本学」の受講生74名（学部1年）を調査対象とした。熊本県立大学では、「熊本の自然や文化、社会に対する理解に立ち、専門の枠を超えて、自ら課題を認識・発見し、“地域づくりのキーパーソン”として地域の人々と協働して課題の解決に取り組む人材」を育てることを目標として掲げている。本講義は、上記人材を育てるためのサービスラーニングプログラムとして、3日間の事前ガイダンスを経て、4日間の集中講義として実施された。

本講義はグループ活動を中心として、次のように進められた。

講義1日目には、教員による熊本の「自然」「文化」「社会」に関わるレクチャーが行われた。ここでは、受講生がグループ内で各担当に分かれてそれぞれの内容を学び、講義後にグループ内で知識を共有するジグソー学習形式で進められた。

2日目には、1日目のレクチャー内容をふまえながら、熊本の地域課題（草原維持に関わる課題）の解決策を考えるグループ活動が実施された。

3日目には草原に出向き、地域住民との協働活動を行った。具体的には、草原を維持するための輪地切り活動が行われ、活動中や活動後には受講生による地域住民へのインタビュー調査が実施された。

4日目には、3日間の活動と地域住民へのインタビュー調査結果をふまえながらグループで練り上げた地域課題の解決策を、Ustream 配信型のニュース番組や学内掲示新聞としてまとめ、活動の成果報告が行われた。本講義を通して受講生は、教員、地域住民、グループメンバー、学生アシスタント（学部2年生以上、プログラムの企画や運営を担当、2グループに1名の学生アシスタントが配置されていた）と関わりながら活動していた。

2. 調査項目および調査方法

(1)関係者による受講生支援

受講生がサービスマーケティング活動中で、関係者からどのような支援を受けたのかを検討するため、他者からの支援に関わる既存尺度（浦、1992；中原、2010）に加え、本研究の予備調査によって得られた自由記述回答をふまえながら、28項目を作成した。

調査対象者には、集中講義最終日の活動振り返り時に、作成した28項目を提示した。各項目の支援を、サービスマーケティング活動中に、教員、地域住民、グループメンバー、学生アシスタントのそれぞれからどの程度受けたかを、「非常にあてはまる=5」「かなりあてはまる=4」「ある程度あてはまる=3」「少しあてはまる=2」「全くあてはまらない=1」の5段階で回答してもらった。

(2)受講生の汎用的能力

本研究では、汎用的能力を自己制御能力、他者との関係構築能力、課題解決能力の3つの領域で捉え、自己制御能力として「自立性」と「感情制御能力」、他者との関係構築能力として「共感的態度」と「リーダーシップ」、課題解決能力として「論理的思考力」に着目した。これらの能力を測定する尺度を島本・石井(2006)や平山・楠見(2004)を活用しながら整理し、講義終了後に提示した。それぞれの項目内容を、講義を終えた受講生がどの程度身につけているかを、「とてもあてはまる」=4点、「どちらかというにあてはまる」=3点、「どちらかというにあてはまらない」=2点、「全くあてはまらない」=1点の4段階で回答を求めた。

3. 統計処理

統計処理には、SPSS Statistics 21.0を使用し、サービスマーケティング受講生がプログラム関係者から受けた支援内容を因子分析および分散分析を実施して検討した。また、サービスマーケティングプログラム関係者による受講生への支援が受講生の汎用的能力に与える影響を重回帰分析によって検討した。

結 果

1. サービスラーニングプログラム関係者による受講生支援の内容の構造

サービスマーケティング受講生がプログラム関係者からどのような支援を受けたかを明らかにするための因子構造を検討するため、本研究で活用した受講生支援尺度全28項目の回答分布を確認した。その結果、28項目中12項目の平均値±1標準偏差の値が最小値(1)か

Table 1. 本研究で測定した「サービスマナー関係者による受講生支援」尺度
(因子分析の結果)

	I	II	III
I 活動支援			
8. 自分について客観的な意見を言ってくれた	.92	.04	-.25
11. 心の支えになってくれた	.81	-.23	.19
5. 自主性を引き出してくれた	.70	-.15	.17
4. 自分の目標、手本となっていた	.68	.09	.04
9. 自分自身を振り返る機会を与えてくれた	.62	.13	.05
13. 物事の考え方を教えてくれた	.43	.27	.06
23. 他者との関わり方を教えてくれた	.41	.28	.08
II 市民性獲得支援			
28. 地元の良さを教えてくれた	-.15	.85	-.12
15. 人生の教訓を教えてくれた	.00	.81	.02
27. 社会のあり方を示してくれた	.05	.68	.06
14. 体験談を聞かせてくれた	.26	.61	-.17
17. 社会のルールを教えてくれた	-.15	.58	.40
III 学習継続支援			
19. 勉強の楽しさを教えてくれた	.11	-.09	.77
18. チャレンジすることの大切さを教えてくれた	.11	.33	.47

重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転を使用

最大値(5)を超えていた。この結果を受けて、上記 12 項目を除く 16 項目に対して因子分析（重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転）を施した。分析の結果、3つの因子が抽出された（Table 1）。

第1因子は“自分について客観的な意見を言ってくれた”“心の支えになってくれた”など7項目から構成されていたことから、「活動支援」と命名した。

第2因子は“地元の良さを教えてくれた”“人生の教訓を教えてくれた”などの5項目から構成されていたことから、「市民性獲得支援」と命名した。

第3因子は“勉強の楽しさを教えてくれた”“チャレンジすることの大切さを教えてくれた”の2項目で構成されていたことから「学習継続支援」と命名した。

以上の結果より、サービスマナー受講生が活動中に関係者から受ける支援は、「活動支援」「市民性獲得支援」「学習継続支援」の3つに大別されることが示された。

2. サerviスマナー受講生が関係者から受ける支援の度合い

次に、受講生がサービスマナーへの参加を通して、プログラム関係者（教員、地域住民、グループメンバー、学生アシスタント）から「活動支援」「市民性獲得支援」「学習継続支援」のそれぞれをどの程度受けているかを検討した（Table 2）。

Table 2. サービスラーニング受講生が関係者から受ける支援の度合い

	教員 (3.26)	地域住民 (3.96)	グループメンバー (3.73)	学生アシスタント (3.95)
活動支援(3.82)	3.09	3.76	4.20	4.25
市民性獲得支援(3.53)	3.17	4.22	3.24	3.49
学習継続支援(3.82)	3.51	3.91	3.77	4.11

括弧内の数値は、各水準における全体平均

支援内容に着目すると、「活動支援」と「学習継続支援」が同程度の値を示しており（平均値 3.82）、統計的にも、「市民性獲得支援」を受ける度合い（平均値 3.53）より高い値を示していた（ $F_{(2,140)}=26.02, p<.001$ ）。

支援を与える関係者に着目すると、「地域住民」からの支援の度合い（平均値 3.96）が最も多く、次いで「学生アシスタント」からの支援の度合い（平均値 3.95）も多かった。統計的にも、「地域住民」と「学生アシスタント」から受ける支援の度合いが、「教員」（平均値 3.26）や「グループメンバー」（平均値 3.73）よりも有意に多いことが示された（ $F_{(3,210)}=23.47, p<.001$ ）。

各関係者による支援の度合いに着目すると、教員から受ける支援の中で最も得点が高かったのは「学習継続支援」（平均値 3.51）であり、統計的にも「活動支援」や「市民性獲得支援」よりも高い値を示していた（ $p<.001$ ）。

次に、地域住民から受ける支援の中で最も得点が高かったのは「市民性獲得支援」（平均値 4.22）であり、統計的にも「活動支援」や「学習継続支援」よりも高い値を示していた（ $p<.001$ ）。

さらに、グループメンバーから受ける支援の中で最も得点が高かったのは「活動支援」（平均値 4.20）であり、「市民性獲得支援」や「学習継続支援」よりも高い値を示していた（ $p<.001$ ）。

最後に、学生アシスタントから受ける支援の度合いを確認したところ、最も高かったのは「活動支援」（平均値 4.25）であり、次いで「学習継続支援」（平均値 4.11）も高い値を示していた。これらの度合いは、「市民性獲得支援」よりも統計的に高い値であった（ $p<.001$ ）。

以上より、サービスラーニング受講生は、教員から「学習継続支援」を、地域住民から「市民性獲得支援」を、グループメンバーから「活動支援」を、学生アシスタントからは「活動支援」と「学習継続支援」を、それぞれ多く受けていることが示された。

3. サービスラーニング受講生の汎用的能力に及ぼす関係者による受講生支援の効果

サービスラーニングプログラム関係者による受講生への支援が、受講生の汎用的能力（自立性、感情制御能力、共感的態度、リーダーシップ、論理的思考力）にどのような影響を与えているかを、重回帰分析を用いて検討した。

まず、教員による受講生支援が受講生の能力定着に与える影響を検討した結果（Table 3）、

Table 3. サービスラーニング受講生の汎用的能力に及ぼす教員による受講生支援の効果

	汎用的能力				
	自立性	感情制御能力	共感的態度	リーダーシップ	論理的思考力
活動支援	-.19	.05	-.17	.00	-.14
市民性獲得支援	.25	.00	.12	-.10	-.32 †
学習継続支援	.24	.00	.09	.27 †	.41 *

表内数値は、標準化偏回帰係数, * $p<.05$, † $p<.10$

Table 4. サービスラーニング受講生の汎用的能力に及ぼす地域住民による受講生支援の効果

	汎用的能力				
	自立性	感情制御能力	共感的態度	リーダーシップ	論理的思考力
活動支援	-.21	-.14	-.20	.06	.02
市民性獲得支援	.28	.31 †	-.02	-.13	-.03
学習継続支援	-.02	-.10	.21	.03	-.03

表内数値は、標準化偏回帰係数, * $p<.05$, † $p<.10$

Table 5. サービスラーニング受講生の汎用的能力に及ぼすグループメンバーによる受講生支援の効果

	汎用的能力				
	自立性	感情制御能力	共感的態度	リーダーシップ	論理的思考力
活動支援	.14	.02	.32 †	.01	.09
市民性獲得支援	.02	.29 †	-.21	.03	-.12
学習継続支援	-.24	-.18	-.14	.18	-.10

表内数値は、標準化偏回帰係数, * $p<.05$, † $p<.10$

「学習継続支援」が「リーダーシップ」($\beta=.27, p<.10$)と「論理的思考力」($\beta=.41, p<.05$)に正の影響を与えていた。教員から学習継続支援を受けている受講生ほど、リーダーシップや論理的思考力を定着させていることが示唆された。また、教員による「市民性獲得支援」が「論理的思考力」に負の影響を与えていた ($\beta=-.32, p<.10$)。

次に、地域住民による受講生支援が受講生の能力定着に与える影響を検討した (Table 4)。その結果、「市民性獲得支援」が「感情制御能力」に正の影響を与える傾向を示していた ($\beta=.31, p<.10$)。地域住民から市民性獲得支援を受けている受講生ほど、感情制御能力を定着させていることが示唆された。

グループメンバーによる受講生支援が受講生の能力定着に与える影響を検討した結果 (Table 5)、「活動支援」が「共感的態度」($\beta=.32$)に、「市民性獲得支援」が「感情制御能力」($\beta=.29$)に、それぞれ正の影響を与える傾向を示していた (いずれも $p<.10$)。グル

Table 6. サービスラーニング受講生の汎用的能力に及ぼす学生アシスタントによる受講生支援の効果

	汎用的能力				
	自立性	感情制御能力	共感的態度	リーダーシップ	論理的思考力
活動支援	.06	.03	.13	-.04	.02
市民性獲得支援	-.27	.11	-.34 †	-.16	-.22
学習継続支援	.11	-.02	.35 *	.18	.09

表内数値は、標準化偏回帰係数, * $p<.05$, † $p<.10$

ープメンバーから活動支援を受けている受講生ほど共感的態度を、市民性獲得支援を受けている受講生ほど感情制御能力を、それぞれ定着させる傾向があることがうかがえた。

最後に、学生アシスタントによる受講生支援が受講生の能力定着に与える影響を検討した結果 (Table 6)、「学習継続支援」が「共感的態度」($\beta=.35, p<.05$)に正の影響を与えており、学生アシスタントから学習継続支援を受けている受講生ほど、共感的態度を定着させていることが示された。他方、学生アシスタントによる「市民性獲得支援」が「共感的態度」に負の影響を与える傾向があることも示唆された ($\beta=-.34, p<.10$)。

考 察

従来の研究では、サービスラーニング受講生の学習成果を向上させる上で、受講生による自律的な経験学習が効果を持つと指摘されてきた。しかしながら、学外を学びの場とするサービスラーニングは、学習環境としての統制が難しく、想定外の事態が起りやすい。大学入学を迎えるまでの自律的な学習経験量が乏しい学生らにとって、想定外の事態が起りやすい環境における経験学習を遂行することは容易ではなく、周囲の他者からの的確な支援が必要であると考えられている。本研究では、従来重視されてきた受講生の経験学習に加え、それを促進すると想定される関係者による受講生支援に着目し、サービスラーニング受講生の学習成果としての汎用的能力の定着に与える効果を検討することで、サービスラーニング受講生の学習成果の向上に関わる理論的示唆を得ることを目的とした。調査の結果、次の4点が示された。

第1に、サービスラーニングプログラム関係者による受講生支援は、「活動支援」「市民性獲得支援」「学習継続支援」の3つに大別されることが示された。特に受講生は、サービスラーニングの活動全体を通して、活動支援と学習継続支援を多く受けていた。

第2に、サービスラーニング受講生は、グループメンバーや学生アシスタントから活動支援を、地域住民から市民性獲得支援を受けていた。特に受講生は、グループメンバーからの活動支援によって他者との関係構築能力(共感的態度)を定着させ、地域住民からの市民性獲得支援によって自己制御能力(感情制御能力)を定着させていた。受講生は、協

働活動をともした関係者より多くの支援を受けながら、活動を遂行し、能力を向上させていると言える。

第3に、サービ斯拉ーニング受講生は、教員や学生アシスタントから学習継続支援を多く受けていることが示された。特に受講生は、教員からの学習継続支援によって課題解決能力（論理的思考力）を、学生アシスタントからの学習継続支援によって他者との関係構築能力（感情制御能力）を定着させていた。受講生は、学内関係者から学ぶことの意義を見出し、具体的な学習へ結びつけている可能性がある。

本研究で得られた結果をまとめると、サービ斯拉ーニング受講生の学習成果が向上するメカニズムは、次のように推察できる。まず、サービ斯拉ーニング受講生は、活動を共にするグループメンバーと互いに支えあいながら活動を遂行し、学生アシスタントから学ぶことの意義について教わることで、経験から学び、他者との関係構築能力の向上につながっていると考えられる。また、受講生は、地域住民と活動を通して関わることで、市民性を獲得し、自己制御能力を獲得していると考えられる。さらに受講生は、プログラム全体を通して教員から学ぶことの意義を教わることで、経験学習に取組み、課題解決能力を定着させている可能性がある。

今後は、受講生による経験学習の遂行状況を明確に捉えた調査を行うことで、本研究で議論したサービ斯拉ーニングにおける学習成果向上メカニズムを実証する必要がある。

参 考 文 献

- Ash, S. L. & Clayton, P. H. (2009) Generating, Deepening and Documenting Learning: The Power of Critical Reflection in Applied Learning. *Journal of Applied Learning in Higher Education*. Vol 1 (1). 25-48.
- Astin, A. W., Volgelesang, L. J., Misa, K., Anderson, J., Denson, N., Jayakumar, U., & Yamamura, E. (2006) Understanding the Effects of Service-Learning: A study of Student and Faculty. *Higher Education Research Institute*, UCLA.
- 馬場由美子・島かおり・大宅顕一郎(2006)学生のボランティア活動と社会的スキルの変化に関する一考察 永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要,36, 155-162
- Brandenberger, J. W. (2013) Investigating Personal Development Outcomes in service Learning: Theory and Research. Clayton, Patti H., Bringle, Robert G. and Hatcher, Julie A. (eds.). *Research on Service Learning: Conceptual Frameworks and Assessments*. Vol.2A. Stylus. 133-156.
- Celio, I, C., Durlak, J., & Dymnicki, A. (2011). A meta-analysis of the impact of service-learning on students. *Journal of Experiential Education*, 34(2), 164-181.
- 中央教育審議会（2005）我が国の高等教育の将来像（答申）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335581.htm

(参照日：平成 28 年 10 月 5 日)

- Cram, S. B. (1998). *The Impact of Service-Learning on Moral Development and Self-Esteem of Community College Ethics Students*, PH D. Dissertation, University of Iowa.
- Furco, A. (1996). *Service learning: A balanced approach to experiential education*. In B. Taylor (Ed.), *Expanding boundaries: Service and learning*. Corporation for National Service, Washington, D. C.
- Galindo-Kuhn, R. & Guzley, R. M. (2001). The volunteer satisfaction index: construct definition, measurement, development, and validation. *Journal of Social Service Research*. 28(1). 45-68.
- 平山るみ・楠見孝 (2004) 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響 教育心理学研究, 52(2) : 186-198.
- Howard, J. P. F.(1998) Academic service learning: A counter-normative pedagogy. *New direction for teaching and learning*. Vol 73, 21-29.
- 岩崎千晶・田中俊也・竹中喜一・川瀬友太 (2012) 関西大学における教育補助者を活用した活動、授業実践の動向分析—学部生・院生の教育力活用制度の全学展開に向けて— 関西大学高等教育研究 3, 53-68.
- 岩崎千晶 (2014) ラーニング・アシスタントの実践的思考に関する分析 関西大学高等教育研究 5, 29-38.
- Jacoby, B. & Associates (1996) *Service-learning in higher education: Concepts and practices*. San Francisco: Jossey- Bass.
- Jameson, J. K., Clayton, P. H. & Ash, S. L. (2013) Conceptualizing, Assessing and Investigating Academic Learning in Service Learning. Clayton, P. H., Bringle, R. G. & Hatcher, J. A. (eds.). *Research on Service Learning: Conceptual Frameworks and Assessment*. Vol 2A. Stylus. 85-110.
- 唐木清志 (2010) アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング 東信堂
- 河井亨 (2012) リフレクションと支援する教授法についての探究 : Learning through Critical Reflection の分析を通じて 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 20, 19-30.
- 木村充・河井亨 (2012) サービス・ラーニングにおける学生の経験と学習成果に関する研究—立命館大学「地域活性化ボランティア」を事例として— 日本教育工学会論文誌 36(3), 227-238.
- 木村充・河井亨 (2015) サービス・ラーニングにおけるチームワークが学生の学習成果に及ぼす効果 ボランティア学研究 15, 87-97.
- 木村充・中原淳 (2012) サービス・ラーニングが学習成果に及ぼす効果に関する実証的研究—広島経済大学・興動館プロジェクトを事例として— 日本教育工学会論文誌

36(2), 69-80.

Kolb, D. A.(1984) *Experiential learning: Experience as the source of learning And development*. New Jersey: Prentice-Hall.

文部科学省 (2013) 地 (知) の拠点整備事業 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/(参照日:平成26年11月2日)

中原淳 (2010) 職場学習論—仕事の学びを科学する— 東京大学出版会

中里陽子・吉村裕子・津曲隆 (2015) サービスラーニングの高等教育における位置づけとその教育効果を促進する条件について アドミニストレーション, 22(1), 164-181.

大石由起子・木戸久美子・林典子・稲永努 (2007) ピアサポート・ピアカウンセリングにおける文献展望 山口県立大学社会福祉学部紀要 13, 107-121.

Omoto, A. M., Snyder, M., & Martino, S. C. (2000). Volunteerism and the life course: Investigating age-related agendas for action. *Basic and applied social psychology*, 22(3), 181-197.

Reeb, R. N., Katsuyama, R. M., Sammon, J. A., & Yoder, D. S. (1998). The Community Service Self-Efficacy Scale: Evidence of Reliability, Construct Validity, and Pragmatic Utility. *Michigan Journal of Community Service Learning*, 5, 48-57.

桜井政成・津止正敏 (2009) ボランティア教育の新地平 ミネルヴァ書房 京都

島本好平・石井源信 (2006) 大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研究 54, 211-221.

浦光博 (1992) 支えあう人—ソーシャルサポートの社会心理学—サイエンス社

和栗百恵 (2015) サービス・ラーニングとリフレクション: 目的と手段の再検討のために ボランティア学研究 15, 37-51.

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC) (2010) 世界をちょっとでもよくしたい—早大生たちのボランティア物語— 早稲田大学出版

付記

本論文は、中里陽子・吉村裕子・津曲隆 (2014) サービスラーニングにおける他者支援の効果 日本教育工学会研究報告集 JSET14-5, pp.47-52 が査読を経て修正されたものである。また、本論文は、JSPS 科学研究費 (研究課題番号: 15K16270) の助成を受けたものである。